

授業実践を自分でふりかえる・ピアでふりかえる

Auto-réflexion et co-réflexion sur les pratiques dans la classe

今中 舞衣子

IMANAKA Maiko

Université de la Ville d'Osaka

maikoimanaka@gmail.com

0. はじめに

本稿は、第25回関西フランス語教育研究会において、主にフランス語を使用言語として実施した同タイトルのアトリエの、日本語による報告である。

本アトリエの目的は、自分自身の授業実践のふりかえりに関する筆者の日々の取り組みとその反省をふまえ、ふりかえり活動を継続させるためのさまざまな技術や道具、評価項目について、アトリエ参加者と共に考えることであった。特に今回は、「教師間のコラボレーション」という研究会の共通テーマを鑑み、自分ひとりでの反省だけではなく、他の教師との協同によるふりかえりの方法についても考察した。

アトリエの出発点は、以下のような問題意識からである。発表者はふだんの授業で学生に、じぶんの学習をふりかえったり、学習方法について他の学生と話しあったりすることをすすめている。例えばポートフォリオのような形で学習記録をつけたり、学習方法についてペアやグループで話し合ったり、といった活動を授業にとりいれている。にもかかわらず、教師である自分のほうはというと、次の授業の準備に追われて、毎回の授業のふりかえりが充分であるとはいえないのではないか。

また、教師という職業は、なかなか自分の実践を人に見てもらい意見を交換できる場がない。近年多くの大学で実施されている学生アンケートの結果はひとつの参考資料になるが、これはあくまでも学生からの視点というひとつの要素でしかない。また、結果を受け取ったころには学期が終了していて、改善すべき点は次学期に持ちこされてしまう。日ごろから授業改善に役立つような技術や道具を身につけ、他の教師との実践的・継続的なふりかえりの輪の中に積極的に参加していなければ、多様な視点から自分の授業をふりかえることはできないのではないか。

以上のような問題意識を出発点として、本アトリエで提案・議論した内容を、以下にまとめておく。

1. 授業実践についてふりかえるための道具・技術を考える

まず、授業実践についてふりかえるための道具や技術について、他の教師の授業を参考にする場合と、自分の授業をふりかえる場合に分けて述べたいと思う。

1.1. 他の教師の授業を参考にする

自分以外の教師の授業を参考にするための方法としては、まず直接見学を申し込むという方法がある。この方法は最も望ましい方法である一方、特別な機会がない限り見学を歓迎しないという教師も残念ながらいるだろう。

身近に授業見学を受け入れてくれる教師が見つからない場合、あるいは物理的に授業参加が不可能な場合は、インターネット上で他の教師の授業を見学することができる。例えば、Youtube (<http://www.youtube.com>) を利用するという方法がある。教科に関わらず、Youtube 上で自分の授業を公開している教師は多い。また、CLE international は独自のチャンネル (MarketingCle) 上で著名な講演者によるフランス語教師向けのアトリエ等を公開している。

Youtube 以外にも、サイト上で授業の録画映像を公開している大学は多い。講義形式のものがほとんどだが、授業の構成や教師の言動を観察するためには利用価値がある。例として、マサチューセッツ工科大学 (<http://ocw.mit.edu/index.htm>)、東京大学 (<http://iionline.iii.u-tokyo.ac.jp>)、多摩美術大学 (<http://tamabi.tv/lecture/index.htm>) などがある。

映像で授業を観察する以外に、オンライン上の教案を参考にするという方法もある。各大学の教育センターのサイトでさまざまな教案をアップロードしている場合があるし、Le point du FLE (<http://www.lepointdufle.net>) などのようにフランス語教育に役立つ資料がデータベース化されているサイトもある。

最後に、最もオーソドックスな方法としては、使用している教科書に対応した教師用指導書をじっくりと読み込み、教科書の著者がどのような活動を想定してその教科書を作ったのかを考えることだろう。残念ながら日本で発行されている教科書には教師用指導書といえるものがない場合も多いが、フランスで発行されている教科書にはほとんどの場合別売の分厚い *guide pédagogique* が準備されており、授業のアイデアが豊富に記載されている。

1.2. 自分の授業をふりかえる

一方、自分の授業をふりかえるための方法としても、他の教師に直接授業を見てもらうという方法が考えられる。ただ、自身の授業改善を目的として参加してもらうのであれば、事前にどのようなコメントをもらいたいのかを打ち合わせしておくのが望ましい。筆者はこれまでボランティア教員や留学生、教員志望の大学院生などさまざまな背景を持つ人の授業見学を受け入れてきたが、ただ漫然と見学してもらうのでは、見学者は自分の授業に参考になる部分や担当教師を批判できる部分だけに目を向けがちになる。教師の言動だけを見るのではなく、学生がどのように学んでいたのかを報告してもらうには、授業をする側にも準備が必要である。

ちなみにこのような場合、筆者は授業を「見学」してもらうのではなく「参加」してもらうことを前提として授業を準備している。なぜなら、新しいメンバーが参加することによって、授業には必ず変化が生まれるからである。例えば、外国語としてのフランス語の授業にフランス語を母語とする留学生がやって来るなら、彼／彼女の母語としてのフランス語の能力や日本語学習への欲求を無視して授業を進めるのは不自然なことである。だから、たとえ彼／彼女の目的が授業「見学」であ

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2011

ったとしても、第三者として客観的に授業を観察することはできないように授業を組み立てるのである。これは「見学者」がどのような背景を持つ人物であっても同じで、必ず彼／彼女の存在を想定した授業づくりを行う。

筆者と同じような立場にたつ授業者ならば、「客観的に」授業を観察してもらうにはもうひと手間かける必要があるだろう。例えば、ビデオ録画や録音の形で授業を記録し、後日それをもとに自分で、あるいは他の教師と一緒にふりかえるという方法がある。フランス語教育の研究会ではあまり見かけないが、中等教育の研修会や英語教育関係の学会で頻繁に実施されている相互研修の方法である。

また、自分自身の授業をふりかえるための具体的な道具・技術としては、①授業評価としての最終アンケートだけを参考とするのではなく、フィードバックシートの導入など、学生から日常的に授業に対するコメントをもらえ授業改善に生かせるような工夫をすること、②日誌・ポートフォリオ・ブログなど、日々の実践を記録するためのフォーマットを準備しておき記述を習慣化すること、③教室で使用できる機材等について勤務先から常に新しい情報を得、うまくいかなかった点について技術的な改善策がないか模索すること、などが挙げられる。

2. 授業実践についてふりかえるための評価項目

授業をふりかえるための技術も身につけ、ひととおりの道具だてもそろえたとして、実際どのような視点から考察し、授業改善につなげていけばいいのか。本節ではこうした評価項目の例として、教室空間、授業構成、教師・学生間のインタラクション、学習を媒介するものの4点について述べたいと思う。

2.1. 教室空間

まず、机・いすの配置などの教室空間の構成が授業の目的にかなったものであったか、という点である。例えば、グループワークを中心とした授業であれば可動式の机・いすのある教室など、学生どうしが向き合って座ることのできる空間が望ましいし、学生が動きまわるような活動を取り入れたい場合は、できるだけ障害物の少ない広い空間を確保することが必要である。同時に、教師の位置、ホワイトボードなどの媒介物の位置、学生の視線の方向などについても考慮する必要がある。

2.2. 授業構成

また、ひとつひとつの作業だけでなく、授業全体の構成が適切であったか、という点も重要である。前もって決めておいた作業の順序や時間配分は適切であったか、課題のタイプは授業目標に合致していたか、個別の課題とグループ課題との設定の仕方には必然性があったか、授業中に学生の評価を行った場合、その評価方法と授業目標に整合性はあったか、などの項目が挙げられる。

2.3. 教師・学生間のインタラクション

また、教師と学生、あるいは学生間のインタラクションが十分に促進されていたかも考察の対象となる。例えば、あいさつ、出席をとる、授業目標の提示、課題に関する指示、グループワークのオーガナイズ、学生への注意、質問と応答、学生を褒める、などの全ての場面において、教師は授業実践の中で生じるインタラクシ

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2011

ンを促進する役割を担っている。ときには「黙る」ことや「すぐに質問にこたえない」ことすらその手助けとなる。たいていのケースでは、教師は別の学生に発言権をゆずることができるからだ。最も反省すべきは、まわりくどい指示やよく練られていない説明、学生の発言に注意しない態度などのために、教師だけが一方的にしやべり続けてしまったような場合である。

2.4. 学習を媒介するもの

最後に、学生の学習を媒介する道具のとりいれ方が適切であったか、という項目を挙げておく。実際の授業では教科書以外にも、視聴覚教材、生教材・レアリア、辞書、ホワイトボード、パワーポイント、クリッカーなど、さまざまなものが学生の学びの手助けとなっている。しかしながら、それらの道具を使うために授業をするのではなく、あくまでも学生に身につけてもらいたい能力があり、その授業目標に合わせて最も適切な媒介物が選ばれるべきであるということを忘れてはならない。

3. おわりに

本アトリエは、「授業実践を自分でふりかえる・ピアでふりかえる」というテーマのもとに、ふりかえり活動を継続させるためのさまざまな技術や道具、評価項目について、アトリエ参加者と共に考えることを目的として実施された。「自分でふりかえる」についてはすぐにでも実施しやすいが、「ピアでふりかえる」についてはそのような機会を積極的に設けていくことが必要であろう。そういった意味で、本研究会のような相互研修の場に継続的に参加することは、非常に意義のあることだといえる。

ちなみに、「ピア」という語は、「同等の立場」という意味を指して用いている。一方が他方よりも上という視点で授業者個人の悪いところを非難したり、あるいは、すばらしい教師の授業を持ってきて披露したりすることを指すのでは決してない。そのような視点はいったん排除して、ひとりひとりの教師が「教える」という仕事のプロフェッショナルとして自由に意見を出し合うことこそ、ピアでふりかえるという活動の要ではないかと思う。

本アトリエは、アトリエの実施方法そのものが筆者の主張を体現することをめざし、参加者が互いに自身の授業実践をふりかえる時間を多くとり、発表者以外の方々からの情報提供や問題提起も取り入れながら内容をふくらませていった。導入の場面では、「なぜじぶんがフランス語の教師になったのか」を念頭において参加者ひとりひとりの人生のフローチャートを作成してもらい、それをもとにペアで話し合ってもらった。意見が出にくい場面では、ペア単位での話し合いの時間をとることによって、発言しやすい雰囲気を促進し、参加者全員が能動的に思考を深められるよう心がけた。

参加者の皆さんには、最後に本アトリエについてのフィードバックシートに記入・提出してもらい、筆者自身がこのアトリエをふりかえる手助けとなった。この場を借りて、御礼を申し上げます。

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2011

＜授業実践のふりかえりに役立つ参考文献＞

Bertocchini, P. & Constanzo, E. (2008) : *Manuel de formation pratique pour le professeur de FLE*, CLE international

Desmons, F., Ferchaud F., & Guerrieri, C. (2005) : *Enseigner le FLE : pratiques de classe*, BELIN

Puren, C., Bertocchini, P. & Constanzo, E. (2007) : *Se former en didactique des langues*, ellipses

Tagliante, C. (2007) : *La classe de langue*, CLE international

Weiss, F. (2007) : *Jouer, communiquer, apprendre*, Hachette

杉江修治・関田一彦・安永悟・三宅なほみ・編著 (2004) : 『大学授業を活性化する方法』 玉川大学出版部

田中武夫・田中知聡 (2003) : 『「自己表現活動」を取り入れた英語授業』 大修館書店

バーバラ・グロス・デイビス・他 (1995) : 『授業をどうする！カリフォルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイデア集』 香取草之助・監訳、東海大学出版会

バーバラ・グロス・デイビス (2002) : 『授業の道具箱』 香取草之助・監訳、東海大学出版会

アラン・ブリンクリ・他 (2005) : 『シカゴ大学教授法ハンドブック』 小原芳明・監訳、玉川大学出版部